

## 2. 学生グループ共同研究報告

# 奈良県における広域周遊型観光 ～北陸の先行事例と比較して～

研究代表者：遠藤 香菜恵

共同研究者：中川 勇太・古川 晴美

- 第1章 研究の背景と目的
- 第2章 奈良県の現在の状況
- 第3章 北陸三県における広域周遊型観光の推進
- 第4章 北陸の広域周遊型観光プラン
- 第5章 結論

### 第1章 研究の目的と背景

奈良県には多くの観光スポットが存在し、観光業は県における最も主要な産業の一つである。しかし、奈良県を訪れる観光客は県庁所在地である奈良市に集中しており、その他の地域の観光客数は伸び悩んでいる。観光客の奈良市一極集中は、奈良県の観光業の課題である滞在時間の短さの一因であると考えられる。県は観光客の滞在時間の短さを危惧しており、対応策として夜の観光の強化が行われてきた。しかし、第2章で紹介するデータからみても、今のところ大きな効果は見込めていないのが現状である。

そこで本研究では、広域周遊型観光を推進している北陸地方を先行事例として、この問題についての対応策を検討する。広域周遊型観光とは、訪日外国人旅行者をはじめとする観光客の地方部における広域的な周遊観光を促し、より多くの来訪・滞在を促進することを目的とした観光である（観光庁『広域周遊観光促進のための新たな観光地域支援事業』）。広域周遊型観光推進を通じて圏域内での来訪・滞在時間を増やすことは、地域全体の経済波及効果を高める意義がある。また他の地域と比較することで対応策の検討の際に参考にできるほか、他の地域と奈良との違いから奈良県の観光の特徴を明らかにし、奈良県ならではの対策を考案することに役立つと考えられる。

### 第2章 奈良県の現在の状況

平成29年度奈良県観光客動態調査報告書によると、平成25年から29年までの5年間の間に、Aエリア（奈良市・生駒市・山添市）を訪れる観光客数は54.3%増加している。しかしながらその他のエリアではほぼ横ばい状態で、大和郡山市や斑鳩町を含むCエリアに至っては、28年と29年を比較すると1.3%減少している。ここから、近年奈良を訪れる観光客は奈良市以外の市町村に足を運んでいないことが多い傾向にあると言える。

また、奈良に滞在する時間自体が短いので、定番観光スポットの東大寺や奈良公園などがある奈良市に観光客が集中しやすい状況になっていることも、奈良市一極集中の要因であると考えられる。近畿運輸局と関西経済連合会の調査によると、近隣の観光地である大

阪での観光客の滞在時間が61.4時間、京都での滞在時間が30.2時間であるのに対して奈良県はわずか4.6時間となっており、他の観光地と比較しても観光客の滞在時間が短いのが顕著である。インバウンド向けの旅行雑誌にも「奈良は三時間あれば十分観光できる」と書かれており、ここからも奈良県は時間がないときに日帰りで行ける旅行地として、あるいは他の観光地を巡る際の通過点として訪れる人が大半であり、泊りがけで時間をかけて観光する場所としては認識されていない実態があるといえる。

### 第3章 北陸三県における広域周遊型観光の推進

福井県・石川県・富山県の北陸三県では、広域周遊型観光を推進しており、その背景の一つには金沢市への観光客の一極集中がある。2015年に北陸新幹線が開業し、北陸地方への観光客数は一気に増加したが、その伸び率は県によって温度差があった。2015年6月までの北陸新幹線の各停車駅の一日当たり平均乗車数は、金沢駅(金沢市)が約8,700人と突出している。つづく富山駅(富山市)でも約4,800人と二倍近い差があるのが実情である(『北陸新幹線開業は金沢の独り勝ち…「一強他弱」では経済成長に限界の声も』より)。そこで、中部国際空港と小松・富山空港を結ぶ愛知・岐阜・富山・石川の四県連携の観光ルート「ドラゴンルート(昇竜道)」が設定され(『昇竜道(ドラゴンルート)公式ホームページ』より)、主にインバウンドの周遊促進を目指したプロジェクトが始動した。このように、奈良市に観光客が集中している奈良県と状況が似ている北陸では、打開策としてすでに広域周遊観光の推進が行われている。

### 第4章 北陸の広域周遊型観光プラン

この章では、奈良県立大学村瀬ゼミの学生が北陸における周遊型プランを検討した過程と、考案したプランをJTB主催の「大学生観光まちづくりコンテスト」の北陸ステージに応募した結果を通して広域周遊型の観光に必要な要素を考察する。

#### 4-1 プラン作成の概要

##### (1) 現状分析・調査

プランを考案する前に、現在の観光の状況を把握するため既存の観光・既出のプランの分析及び現地調査を行った。まずは大学生観光まちづくりコンテスト北陸ステージにおける2016年から2018年の受賞事例、さらに北陸ステージ以外の過去の受賞事例85事例について分析することで、北陸における広域周遊型観光プランの傾向を分析した。図表1は、2018年度大学生観光まちづくりコンテストの北陸ステージにおける受賞事例を分析した際に使用した表の一部である。

分析にあたっては「着目点と現地調査」「メインターゲット」「プランのコンセプト」などの項目を設定し、「大学生観光まちづくりコンテスト2019」のホームページで閲覧できるすべての事例を分析した。分析の結果、過去の受賞プランは日帰り客が多いことや地域の魅力を活かしきれていないことを課題として挙げているケースが多くみられた。ターゲットの設定としては女性と若者が多い傾向にあることが分かった。

図表1 過去事例分析表

2018年度	大学名	着目点・現地調査	ターゲット	コンセプト
官公庁長官	明治	魅力を伝えきれていない心と北陸の資源水を活かす	日常を離れて自分の事を考えたい人	水と心から自分を見つめる
2位優秀	中京	北陸企業の新卒者獲得の不十分さ、中堅企業の多さ	大学生	リゾバ×インターン×旅
3位優秀	跡見学園女子	金沢止まりの観光客、認知度低い、若者少ない	若者	バックパッカーと北陸3県を繋げる
北陸経済連合会	千葉商科	北陸の観光資源のイメージが住民とそうでない人で同じ	若者・家族	廃油利用したフラワーキャンドル
イメージ up 富山	慶應義塾	金沢新幹線効果、欧米インバウンド伸びしろ、埋もれた観光資源、点在スポット	北陸に行ったことのない欧米人	外国人向けの謎解きツーリズム
イメージ up 石川	山梨県立・英和	繊維産業、機織り技術、職人	海外の富裕層	職人との交流・機織り体験
イメージ up 福井	金沢	観光客密集、資源消費、地域について学べない、郊外施設の客数増加		食材集め主体的に学んで体験できる
広域周遊協議会	金城学院	生活満足度は高いが定住率低い、外国人の来訪者数少、交流人口増やしたい		旅行目的需要・供給のためのアプリ開発
JTB賞	富山国際	若者の流出、加速する人口減少、若者が帰りたくなるまち		若者が帰りたくなるまちづくり

出典：『大学生観光まちづくりコンテスト2019』

## (2) 金沢市での現地調査

6月15日に現地調査のため金沢市を訪問し、金沢海みらい図書館・石川県立図書館での文献調査、金沢学生のまち市民交流館での聞き取り調査を行った。調査により、北陸の広域周遊観光プランを考案する上での課題として、北陸三県はそれぞれ歴史的背景が異なるため、三県に共通した観光資源がないということが判明した。

さらに現在提供されている観光プランの傾向を明らかにすることを目的として、JTBエキマルシェ大阪店の店頭にあった105のパンフレットを入手し、掲載されていたJTBが提供している観光プランの事例の分析を行った。

合わせて、北陸で現在行われている施策の調査も行った。北陸三県のホームページを閲覧して各県の政策方針を調査した結果、三県とも高速道路や新幹線などの活用が積極的で、交通インフラを重視した施策を行っていた。また、三県の施策の比較から各県の傾向も明らかになった。福井県では地域再生を担う人づくり先進地を目指しており、人・家族・地域とのつながりを活用した施策が行われるなど人重視であるのに対し、富山県はダムを利用した観光やコンパクトシティ化などインフラに関連した施策が多い。石川県は新規観光客の獲得や、人とモノの広域的な交流など、より広範囲の地域や人との関わりを目指した施策が多い傾向にあった。

### (3) 観光まちづくりの定義の明確化

現状調査を行うなかで改めて「観光まちづくり」という言葉の認識を明確にする必要性を感じたため、観光まちづくりを「観光」と「まちづくり」に分けて定義づけを行った。観光学概論の講義のレジュメより、観光の定義は「他の土地を視察、見物すること」「余暇・自由時間に、非日常空間に移動し、自主的に体験、交流、遊び、学ぶこと」とした。また、観光の意義・役割を「非日常空間からの脱却」「自己実現、修養、達成感」「他者との交流、親睦、家族との団らん」とした。

また、日本交通公社が公開している「観光資源台帳」、JTBFが公開している「旅行意識調査」、観光学概論のレジュメを参考に旅行形態の分類を行った。図表2は作成した旅行形態の分類表である。合わせて、広域周遊やまちづくり、持続可能性の定義づけも行った。観光庁『広域周遊観光促進のための新たな観光地域支援事業』より、広域周遊型観光とは訪日外国人旅行者をはじめとする観光客の地方部における広域的な周遊観光を促し、より多くの来訪・滞在を促進することを目的とした観光であるとし、広域周遊の目的は地域全体の経済波及効果を高めることであると定義づけた。また、まちづくりとはインフラ整備などの都市計画、条例制定などの地域秩序の整備、地域住民のコミュニティづくり、地域の財政施策などによってまちの構想を実現していくことであるとした。持続可能性とは、こうしたサービスの提供によってサービスを提供する側とされる側の双方に利益がある状態であるとした。

よって、持続可能な観光まちづくりとは、地域の資源を活用して人との関わりの場を創出し、観光まちづくりに関わる人々に利益が還元されながら地域の経済的活性化及び非経済的な面の活性化を目指すことであると定義づけ、考案するプランの方向性として設定した。

図表2 旅行形態の分類表

資源分野種別			目的・意識等種別			
分野	時代・形態	資源名	分野			
自然資源		山岳・高原・湿原・原野	自然観光、花の名所巡り、自然現象観賞、秘境ツアー、ジオツーリズム、エコツアー	パワースポット	海浜リゾート、高原リゾート、	スキー・スノーボード、マリンスポーツ、登山・山歩き、海水浴
		湖沼、河川・峡谷、滝、海岸・岬				
		岩石・洞窟				
		動物、植物				
		自然現象				
	温泉	温泉旅行				
人文資源	歴史的資源(江戸時代以前)	史跡・城郭、歴史的建築、碑、像、産業遺跡	産業遺産観光	農業体験、産業観光	町並み散策、都市観光	歴史・文化観光、武将観光、町並み散策、世界遺産巡り
	近代・現代的資源(明治以降)	観光施設、近現代建築、公園、近代化産業遺産、工場、建造物、博物館、テーマ公園・テーマ施設				ショッピング、芸術鑑賞、テーマパーク、動物園・水族館、
	無形・社会資源	民族文化(祭り、伝統行事、食)				祭り・イベント、グルメ
複合資源(景観=自然+人口)		歴史景観、田園景観、都市景観、文化景観、郷土景観、庭園・公園				
その他						スポーツ観戦、おしゃべり旅行、アニメツーリズム、環境にやさしい旅行

出典：観光学概論レジュメ、日本交通公社『観光資源台帳』、JTBF『旅行意識調査』

#### (4) プランの考案

分析・調査の結果わかった北陸の観光の状況を踏まえて、観光プラン案のブレインストーミングを行い、出たプラン案を大まかに分類した。その結果、「図書館を利用した観光」「夜間の観光」など14種類に分類された。

さらに分類した14種類の観光プランについては北陸との親和性や課題点を分析し、プランの魅力を点数化して比較した。プランの点数化には、ピューセクションという手法を用いた。まず分析対象を評価する評価項目を設け、評価項目の中でも重要な要素であると思われるものは配点を2倍にするなど、項目の比重を設定する。例えば今回は評価項目を「独自のアイデアである」「実現観光性がある」「集客性がある」「雇用を創出する」「経済効果が見込める」「非経済面での効果がある」「代替可能性が低い」「北陸と親和性がある」「広域連携を行える」の9つに設定し、前半の二つの項目については得点を2倍とした。そして、いくつかある分析対象のうち一つについて、各評価項目を全て標準とし、基準とする。今回は「図書館を利用した観光プラン」を基準に設定した。他の分析対象については基準と比較して優れているか、劣っているかをプラス、マイナス、標準で表す。プラスは1点、標準は0点、マイナスは-1点として計上し、比重の大きい項目の点数は2倍する。

こうして点数化したプランのうち、合計点が上位三つのプランを最終候補として仮案を考案し、プランにおける利害関係者の相関図を作成して実現可能性や効果について検討を行った。その結果、「北陸の高い学力を新たな観光資源とした学校再現プラン」が最も実現可能性が高いと考えられたため、学校再現プランを採用することに決定した。学力を観光資源とした理由は、北陸三県はいずれの県も中高生の学力テストの点数が全国トップクラスであることで有名で、学校教育にも独自の教育方法を取り入れるなど県を挙げて学力強化に取り組んでいるという共通点があるためである。

#### (5) 学校再現案の検討

図表3 学校再現案プラン仮案概要①

コンセプト	懐かしの学校生活を大人になって味わう。北陸の廃校を利用して完全再現された小中学校の一日を体験する。
資源	北陸の教育、学力の高さ
運営主体	旅行会社
規模	20～40人
日程	主に土日の二日間。一日目は9時から19時、二日目は8時から16時まで。
ターゲット	学校教育、学習塾の関係者。子どもの頃の学校生活にあこがれている人。大学生以上の大人。
行程	一泊二日。一日目は教室で6時間目まで授業、給食、掃除、部活動、宿題を実施する。二日目は遠足を行い、北陸のまちや産業について知る。

上の表は、学校再現プラン案の検討にあたって作成したプランの仮案の概要である。

この仮案をもとにプランの流れの検討や考えられる業務のピックアップを行い、どのような運営主体や施設がプランに適しているか考察した。想定される業務が多く、NPO法人では資金・ノウハウとともに不十分である可能性が高いため、運営主体としては資金・ノ

ウハウにたけている旅行会社が適していると結論付けた。また、利用施設はより学校を再現でき、尚且つ宿泊ができる施設である必要性から、廃校をリノベーションしたキャンプセンターを利用するのが望ましいという結論に至った。

#### (6) キャンプセンターへのインタビューの実施

そこで、福井県にあるキャンプセンター「農村deキャンプセンター」の職員の方にインタビューを行った。質問事項は施設利用が可能であるか(可能であった場合はどの程度の利用が可能なのか)と、プランの課題点の二点である。いただいた回答によると施設利用自体は可能であるが、給食のメニューを再現することへの対応は難しいとのことだった。また、プランの課題点としては授業内容によって集客が左右されることが考えられるため、授業内容の充実が必要であること、加えて金銭的にシビアなプランニングが必要であるとのこと指摘を受けた。

#### (7) インタビューを踏まえた再検討

農村deキャンプセンターへのインタビュー結果を踏まえてプランの再検討を行い、ターゲットの選定と授業内容の検討に向けた方針を設定した。ターゲットの候補として「学校生活を追体験したい人」「教育関係者」「50代～60代半ば中間管理職で人に教えられるという立場を体験して初心に戻りたい人」「子供が勉強しなくて困っている親とその子供」という四つを挙げ、それぞれのターゲットにとってのプランに参加するメリットを考察し、ターゲットを「子供が勉強しなくて困っている親とその子供」に設定した。このターゲットが学校再現プランに参加するメリットは、親子の交流を深める場になることである。親側にとっては子供の気持ちを体験することで子供への理解が促されたり、子供の学習や学校生活へのサポートを考えるきっかけになったりする。一方子ども側は普段とは違う場所で保護者と一緒に授業を受けられるという新鮮さを感じながら参加することができる。お互いにいつも家庭で見せているのとは違った顔を見せることで親子の相互理解につながり、より親子のかかわりを強化することができると考えられる。そこで授業内容の方針は、「北陸地域の学力の高さの要因を探り、学力の高さ・学校教育を観光資源と捉え、楽しさを付随して授業という形で娯楽と学びを提供する」に決定した。

#### (8) 北陸の教育委員会へのインタビューの実施

北陸の小中学校における教育施策についての情報を得るため、北陸各県の教育委員会のうち、許可をいただいた福井県・富山県の教育委員会へのインタビューを行った。インタビューで得た教育施策についての情報は以下のとおりである。

図表4 富山県・福井県教育委員会の主な取り組み

富山県の主な教育施策	福井県の主な教育施策
対話型などのアクティブラーニングを重視	独自の学力調査の実施
教員の育成を重視し、授業のクオリティ向上	少人数教育、授業名人制度、シニアティーチャーの活用による授業のクオリティの向上
『授業の達人』DVD 制度	ふくい理数グランプリの開催、サイエンスラボから理科実験の映像配信
『B 問題に挑戦』『単元テスト』などの独自教材	オリジナル教材『福 English』の配布、すべての中学・高校に ALT 配置
職業体験プログラム『14 歳の挑戦』の実施	無言清掃、ほうきを使わない掃除の実施
	グーパー体操の実施

出典：富山県・福井県教育委員会へのインタビュー結果をもとに作成

これをみると、両県とも授業のクオリティ向上に力を入れており、オリジナル教材や独自の教育施策なども積極的に導入していることが分かる。

#### (9) プランの課題調査

プランの課題について客観的な指摘をいただくことを目的に、JTB 中部北陸商品企画センターにインタビューを申し込み、電話にて対応していただいた。対応していただいた職員の方によれば、元々観光とは関係のない学校と旅行を結び付けたプランを催行することはハードルが高く、授業内容や対象とする人物像、勉強と観光をどう旅行につなげるのかという部分を詳細にする必要があるとのことであった。

#### (10) 学校再現プラン再々検討

インタビューでいただいた回答を踏まえ、プランの行程、ターゲット、料金を細かく設定し、プラン案の最終版を完成させた。次の節でプランの詳細を説明する。

### 4-2 学校再現プランの詳細

学校再現プランのコンセプトは、学力全国トップの地・北陸で学びにつながる楽しい時間を過ごすことである。周遊プランを考えるうえで北陸に共通した観光資源がないことが課題であったことから、「学力の高さ」「教育」を新たな北陸の観光資源とした。ターゲットは「学びの楽しさを知りたい親子」「再び教室に戻って授業を受けてみたい大人」「北陸の授業について知りたい人」の三つに設定した。学力の高い北陸三県それ

図表5 学校再現プラン行程表

12:00~13:00	集合、給食
~13:30	昼食終了
	10分休憩
13:40~14:00	朝礼
	5分休憩
14:05~14:50	一限
	10分休憩
15:00~15:45	二限
	10分休憩
15:10~15:55	三限
	10分休憩
16:05~16:30	掃除
	5分休憩
16:35~17:00	終礼
17:00~17:30	他県と同プラン紹介など

それぞれの県で独自の授業スタイルの「学校再現プラン」を、日にちをずらして催行する。観光客は興味がある県の授業を選んで受けることができるため、従来のルートが固定されている周遊型観光と比較して行き先の自由度が高いプランとなっている。また、あえてプラン行程を午後からの半日に設定した。半日プランにすることで観光客の自由時間の確保につながり、空き時間に県内で観光することを促す狙いがある。そして開始時間を午後を設定することで時間帯が遅くなり、宿泊客の増加にもつながると考えられる。図表は具体的なプランの行程表である

#### 4-3 大学生観光まちづくりコンテストへの応募結果

作成したプランについて、客観的な評価を得ることを目的としてJTBが主催する「大学生観光まちづくりコンテスト」に応募した。結果としてプランは本選まで勝ち残り、審査員特別賞の一つである北陸経済連合賞を受賞した。審査員によるプランの講評によれば、学校教育が観光資源になるという気づきが評価ポイントとなっていた。ここからも、広域周遊型観光を行うには、周遊ルートの圏域に共通したその土地ならではの観光資源が必要であると考える。

その一方で広域周遊の観点から、複数県での組み合わせることによるメリットの明確化が課題であるとの指摘もあった。確かに学校再現プランは各県が独立して行うことのできるプランであるため、周遊をすることでさらに魅力が上がるなど周遊のメリットが必要であると考えられる。このことから、広域周遊観光には周遊するメリットが感じられる内容であることも重要であるということができる。

### 第5章 結論—奈良ではどのような周遊型観光が考えられるか

第四章から、広域周遊型の観光においては圏域に共通した観光資源が必要であり、また周遊することで観光の魅力が上がるなどのメリットがあることが重要であるという結論が出た。

奈良県は、ユネスコ世界遺産や特別史跡などの文化財保有数が都道府県としては日本最多である（『奈良県 - Wikipedia』より）。古墳時代・飛鳥時代・奈良時代には日本の中心地として栄えていたことから遺跡は奈良県全土に広がっており、文化財は奈良県全土に共通する観光資源と言える。しかし、奈良市以外にある文化財や歴史的建造物などは鉄道やバスなど交通の便が整っていないところにある場合が多く、観光客の誘致が進まない原因の一つであると言われている。

そこで提案したいのが、あえてバスなどの公共交通機関を利用せずに、徒歩や自転車を利用して泊りがけで奈良県各地の遺跡を巡るツアーである。奈良市内を巡る街歩きツアーやサイクリングツアーはよく見られるが、それとの違いは市をまたいで行う点である。泊りがけで広範囲を徒歩や自転車で移動するのは少々ハードルが高いように感じるかもしれない。しかし共通点のある遺跡をルートに組み込むなど、ストーリー性を持たせることによって周遊するメリットを感じさせることができれば、奈良県ならではの広域周遊観光になりうる可能性があると考えられる。



〈参考〉

安福恵美子(2016)『「観光まちづくり」再考—内発的観光の展開へ向けて—』

淡野明彦(2004)『アーバンツーリズム—都市観光論—』

奈良観光局インバウンド・宿泊戦略室『奈良県観光客動態調査報告書』奈良県公式ホームページ [www.pref.nara.jp/10071.htm](http://www.pref.nara.jp/10071.htm) 最終閲覧日 2019年8月20日

観光庁

[https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/gyoukaku/h27\\_review/h29\\_fall\\_open\\_review/siryo.pdf](https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/gyoukaku/h27_review/h29_fall_open_review/siryo.pdf)  
産経ニュース『北陸新幹線開業は金沢の独り勝ち…「一強他弱」では経済成長に限界の声も』

<https://www.sankei.com/west/news/150805/wst1508050005-n2.html>

最終閲覧日 2019年12月25日

『昇竜道(ドラゴンルート)公式ホームページ』

<https://www.dragonroute.net/> 最終閲覧日 2019年12月14日

『奈良県—Wikipedia』 <https://ja.wikipedia.org/wiki/奈良県> 最終閲覧日 2020年1月25日